
シンポジウム 3

Andrology・Female urology におけるそもそまとまっとう

司 会	永 井 敦 (川崎医科大学)
	松 山 豪 泰 (山口大学)
演 者	白 石 晃 司 (山口大学)
	大 平 伸 (川崎医科大学)
	武 井 実根雄 (原三信病院)
	井 上 雅 (みどりクリニック)

司会のことば

Andrology は雄性動物やヒト男性を対象とする学問で、男性医学と訳される。泌尿器科領域では、主として男性の性腺・生殖器を扱い、性機能障害、不妊症や前立腺疾患などが対象となる。Female urology は、文字通り女性泌尿器科領域を扱う学問であり、泌尿器科領域でも大きなテーマの一つになってきた。今回の総会のテーマ「そもそまとまっとうを考える」には、そもそも当たり前と思っている治療が、患者に対してまっとうで有益な治療かどうか、今一度考え直そうという賀本会長からの強いメッセージが発信されている。

本シンポジウムでも複数の疾患に焦点を当て、現在の概念や治療の考え方を改めて見直し、今後の診断・治療の方向性を再確認することを目的として、西日本におけるこの領域の第一人者の先生方に発表していただいた。

山口大学の白石晃司先生には、男性不妊に関する生殖医療について解説していただいた。白石先生は日頃から不妊というカップルの問題を、婦人科主体の生殖医療で解決を図ることが、そもそも本当に良いのかと問題提起をされている。体外受精や顕微授精などの補助生殖医療技術 (ART) が必要となる原因の約半数は男性因子であり、そもそも異常のない女性側に侵襲的な治療が強いられる状況も不自然である。精索静脈瘤をはじめ、内分泌異常や閉塞性無精子症など男性側の治療で非 ART 妊娠を望めるケースは多く、男性因子の治療機会が与えられないまま、ART が盛んに行われている日本において、まっとうな不妊治療が行われているとは言えない状況で

ある。まっとうな生殖医療がなされるよう泌尿器科医の観点から強く発信していただいた。

川崎医科大学の大平伸先生には、加齢男性性腺機能低下症候群 (LOH 症候群) を取り上げていただいた。LOH 症候群診療の手引きは 2007 年の策定であり、そもそも古い概念で現在まで診断と治療が行われていたことになる。今回、新たにアップデートされることになり、作成委員会の一員である大平先生に改訂のポイントと、あくまで症候を中心として適応を考えるという、まっとうな概念を解説していただいた。診断基準に含まれる総テストステロン値、遊離テストステロン値などの検査データが適応を判断するうえでの必須項目ではなくなったことで、テストステロン補充療法の適応が広がるものと思われる。高齢者が増加し続ける日本において、LOH 症候群の有病率は今後もさらに増加することが予想され、重要な課題の一つになるとと思われる。

原三信病院の武井実根雄先生には、慢性骨盤痛症候群の中で間質性膀胱炎に焦点を当てていただいた。痛みを訴えない症例に対しての診断病名、保険診療での矛盾点などを指摘していただき、間質性膀胱炎に対する考え方を解説していただいた。「そもそも痛みを訴えない症例に対し膀胱痛症候群という痛みが主であるかのような名称が付いていること自体まっとうなことなのだろうか」という問いかけから始まり、間質性膀胱炎のタイプ分類や病態の違いを考慮することが必要なことを力説していただいた。少なくともハンナ型と非ハンナ型 (骨盤痛症候群) に分けて再検討されるべきであるというのがまっとうな考えであると強調された。

みやびウロギネクリニックの井上雅先生は、婦人科研修もされたウロギネコロジストとしてのパイオニアの一人であり、「そもそもこれでいいのか、これがまっとうな診療なのか」という疑問を提示していただき、開業医の立場で自由に解説をしていただいた。婦人科疾患と密接な関連のある Female urology 疾患においては、泌尿器科だけの知識や技術では対応できない疾患が多数ある。今回は通常外来診療でよく遭遇する膀胱炎や外陰部掻痒、頻尿、尿失禁、残尿感のそもそまとまっとうについ

て鋭い切り口で解説していただいた。近年注目度の高い女性性機能についても井上先生は情熱的に取り組んでおられ、female squirting についての新しい知見に関する解説もしていただいた。

今回のシンポジウムにおいては、「Andrology・Female urology」の理解とそのまっとうな治療戦略を学ぶことができ、また今後の課題も明らかになったと考える。今後の本領域の更なる発展に寄与する企画となったと確信している。

